



海外姉妹都市青少年交流事業 40周年記念誌~軌跡~

目次

ご挨拶・祝辞	1
OBからのメッセージ	2
各姉妹(友好)都市·姉妹城紹介	8
派遣都市・人数(年度別一覧表) ――――	9

題字~軌跡~

記念誌の発行にあたり、題字はOB会の皆さんからいただいたアイデアの中から、「軌跡」に決定しました。揮毫は、1990年度アデレード市派遣生で、市内で書道の先生をされている菅原幸子さんにお願いしました。文字には、これまでの40年の歩みと未来への希望が込められています。

ご挨拶



公益財団法人姫路市文化国際交流財団 理事長 中元 孝迪

公益財団法人姫路市文化国際交流財団が行う海外姉妹都市 青少年交流事業が、このたび交流40周年を迎えることとな りました。

青少年交流事業は、昭和55年(1980年)に姫路市の姉妹都市アメリカ・フェニックス市へ10名の高校生を派遣したことから始まりました。これまでに1,385名の中学生、高校生が姫路市を代表する派遣生として各国の姉妹都市へ派遣され、姉妹都市からも1,066名を受け入れ、国境を越えて友好を深めてまいりました。

柔軟な感性で異文化を体験した派遣生の中には、世界に羽ばたき活躍されているかたはもちろん、帰国後もホストファミリーとの交流を続けたり、地域の国際交流活動に参加して

いるかたが多くいらっしゃいます。このように、次世代の国際交流の担い手として多くの派遣生が、姫路市の多文化共生 社会の発展に貢献しています。まことに喜ばしい限りであります。

40年にわたり実りある青少年交流事業を継続することができましたのは、長年にわたり派遣生たちを温かく受け入れ、見守ってくださったホストファミリーの皆様、様々にご協力をいただいた地域の皆様のご尽力の賜物であり、心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、令和2年度の青少年交流事業は中止を余儀なくされましたが、これからは、「ニューノーマルー新しい生活様式ー」の中で国際交流の在り方を模索しながら、さらなる国際交流活動の展開に全力で取り組んでまいります。

今後とも、皆様のご理解とご協力を賜りますよう、お願い 申し上げます。

祝



| ^{姬路市} | | 清元 秀泰 市長

海外姉妹都市青少年相互派遣事業が今年めでたく40周年という節目の年を迎えられました。公益財団法人姫路市文化国際交流財団の主な事業の1つであるこの事業は、姫路市が昭和51年(1976年)にアメリカ・フェニックス市と締結した姉妹都市提携が契機となり、昭和55年(1980年)にフェニックス市へ高校生を派遣したのがはじまりです。

現在、本市は6つの海外姉妹・友好都市、2つの海外姉妹城と提携を結んでいます。青少年交流などの教育交流を中心とした姉妹都市交流の促進に取り組みながら、国際社会への理解促進及びお互いの価値観や文化の違いを認めながら共に生きていく、多文化共生社会の実現を目指しています。

本市におきましても、平成29年(2017年)に「姫路市国際化推進プラン」を策定し、「多文化共生社会の実現」及び「国際交流の推進」に向け、「人権意識・国際感覚豊かなひとづくり」「外国人が暮らしやすい環境づくり」「世界に開かれた魅力あふれるまちづくり」の3点を基本目標に設定し、外国人にとってくらしやすく、活動しやすいまちづくり、さまざまな価値観との出合いによって新しい文化や活力が生まれ、まちの魅力によって、世界中から多くの人々が集う交流都市となることを目指しています。

多様な文化や価値観を理解・尊重するということは、個性 や多様性の尊重につながり、一人ひとりが自己を実現するこ とができる社会をつくることにつながります。

今後も、青少年交流をきっかけに始まった姉妹都市との交流や 世代を超えた交流が、広く深く続いていくことを願っています。



^{姫路市交換学生OB会} 会長 山口 孝 さん

昭和57年(1982年)4月のある日、当時高校生であった私は、教室の後ろの黒板に貼ってあった一枚の紙に目が留まりました。その紙には、姫路市の姉妹都市・米国フェニックス市への派遣生募集中とありました。途端に私は、決心しました。親善大使として、フェニックス市へ行こうと。それからは、両親や学校の先生の協力があって、何とか面接を受けることができました。面接の最後の英語の質問に、あまり上手に答えることができず、半分あきらめかけていたある日、友人が新聞の切り抜きをいきなり私に差し出しました。それには、「山口君ら10人を派遣」と書いてありました。その時の喜びは、一生忘れることはないと思います。

その後、事前研修、先輩のアドバイスを受け、7月にいよいよ 出発。フェニックスでは、アメリカの家族ができ、一緒に行った9 人の友人もできました。私が派遣された年から38年が経った今 でも、この家族と、友人との交流は続いています。

さて、40年にわたりこの青少年交流事業を続けてこられた、公益財団法人姫路市文化国際交流財団の偉業は、他の都市には無い素晴らしい事業と感服しております。海外姉妹都市に行ったことがきっかけとなり、世界のあちらこちらで活躍されている派遣生は少なくありません。私は海外では活動しておりませんが、青少年交流事業により海外姉妹都市に派遣された1,385名の長として、これからも貴財団のお役に立てればと思っております。最後に、私どもに、このような素晴らしい機会を与えていただいたことを、深く感謝します。

∷ OBからのメッセージ

1980年 フェニックス市派遣

石井 秀幸さん 会社員 沖縄県那覇市在住

1978年に新東京国際(成田)空港が開港し、徐々に海外旅行が身近になってきた1980年7月24日から12日間、第一回高校生友好親善団として10名がフェニックス市へ派遣されました。そのころは、TVや映画等でしか情報が入手できず、アメリカは遠い夢の国でした。

当時国際線が就航していた伊丹空港からパンアメリカン航空(パンナム)で成田空港へ、乗り換えてロサンゼルスに到着。当時世界ナンバーワンでアメリカを象徴するパンナムは搭乗した時から、機内は全てアメリカで、これから始まる未知の体験への期待と不安が入り混じったドキドキ感を今でも覚えています。

フェニックスでは、到着翌日の市長への表敬訪問と地元 TV出演、最終日前日の送別パーティー以外は、他のメン バーと会わずにそれぞれのホストファミリーと過ごしまし



ホストファミリーと

た。私がお世話になったホストファミリーは一歳上の男子高校生がおり、短い期間でしたが、彼や彼の友人を通して同年代のアメリカの学生の生活を体験することができました。見るも

の、食べるもの、体験すること全てが新鮮で、日本では経験 できないことばかりでした。その後アメリカを訪れる機会が 度々ありましたが、この時の感動に勝るものはありません。

当時はまだ地方自治体が主催して行う海外派遣事業は多くなかったと聞いております。その時代に学生の海外交流の重要性を説き、派遣事業を推し進め、姫路市の国際交流事業に生涯情熱を傾けられた渡辺公久・京ご夫妻、その進言を実現していただいた姫路市国際親善友好協会(現:姫路市文化国際交流財団)の皆さま、また万全の体制で受け入れていただいたフェニックス姉妹都市委員会のメンバーの皆さまのご尽力に心より感謝を申し上げます。その後も先人の意志を引き継ぎ、関係者の努力で多くの学生が貴重な体験をすることができました。

現在は、どこでも簡単にネットを通して世界中の情報がリアルタイムで入手でき、バーチャルな体験もできます。外に出れば、各国の料理が気軽に楽しめます。SNSを利用して無料でいつでも海外と気軽にコミュニケーションを取れます。そのためか最近の若い人達の海外旅行や留学への関心が低くなっているようです。しかしながら、実体験に勝るものはないと強く思います。多感な学生の時に異文化に触れることは人生にとって宝物になるはずです。機会があれば是非チャレンジして姫路市と各姉妹都市の相互理解を深め、更なる友好関係を築いていただければと思います。

1993年 アデレード市派遣

東郷 亜由美さん 声楽家 イタリア ロンバルディア州コモ県在住

私がこの派遣プロジェクトに参加したのは、四半世紀以上前のことですが、今も鮮烈に覚えています。間違いなく私の人生を決める大きな経験の1つとなりました。

私は、日本、スイスを経て、現在、イタリアで生活してい ます。職業は、声楽家です。ですが、マルチ・フリーラン サーでもあります。私が派遣された頃には、既におぼろげに 将来は音楽家になるんだろうと考えていました。でも同時に、 何でも首を突っ込みたい私は、"それだけで満足できる?" と。その後、迷走すること十数年。自問自答の日々でした が、あるきっかけで、再び日本を飛び出すことにしました。 いえ、"飛び出すことにした"と言うととても格好いいです が、そのチャンスは知り合いから頂き、躊躇していたところ を父に放り出された、と言った方が正しいかもしれません。 果たして、海外に行くことが正解なのか。そんな想いの中、 周りに叱咤激励され、誰も知らない異国で、多人種、多様な 年齢の人々の中で生活を始めてすぐ、そんな疑問は吹っ飛び ました。「あ、この感じ、初めてオーストラリアに交換留学 させてもらった時の感覚に似てる! | と。なんとも言えない 自分が解き放たれたような震えるような感覚。そして、体の 底から湧いてくるエネルギー。あぁ、生きて行くとはこうい うことか!と。

私の人生は、いつも大切なタイミングで人に恵まれています。大学院に留学したスイスでは、生涯の師匠に出会い、声楽の技術だけではなく、自分を信じること、限界を決めないこと、既成概念を捨てることなど、生きる上でも大切なことを沢山教えていただきました。そこに私の"何でもやりたい症候群"が相まって、自分に依頼があることは全てやってみようというチャレンジ精神となり、声楽家ではあるけれど、モデルもやってみる、テレビ番組の通訳もやってみる。翻訳のプロじゃないけれど、それで人が喜んでくれるならとやってみる。次はどんな依頼があるだろうかと毎日わくわくドキドキ。中途半端と言われるかもしれません。でも、海外に出たからこそ。もちろん音楽は私にとって最重要事項。でも他

にもしかして思わぬ能力があるのかもと思うと、挑戦せずにはいられません。

いい歳かもしれない、他から見て意味がないのかもしれない、でも、そんなことは関係ないと思います。自分がこれだ!と思った時が、そのタイミング。他を気にしてやらずに後悔するなら、やってみて派手に失敗してみよう!それが私の人生です。



姫路中央ロータリークラブ創立30周年記念のコンサートでのオペラの一幕(2014年)

1990年 シャンティイ市派遣

池田 泰子 さん 高等学校教諭 姫路市在住

1990年の夏、私は派遣第一期生として、シャンティイを訪れました。ホストファミリーはマダムと大学生の娘さんの二人暮らしの家庭でした。マダムは英語が全くわからず、娘さんの通訳でなんとか過ごせましたが、その娘さんも2日ほどで、バカンスに出かけてしまいました。それでも、時間が経つと不思議なもので、マダムとも何とか意思疎通ができるようになっていきました。別れの日は、今思うとマダムに伝わっていたのかは不明ですが、「また帰ってきます。」と言って、シャンティイを後にしました。

私はあれから何度もシャンティイを訪れています。シャンティイを出発し、その後訪れたシュノンソー城へ続く並木道も、再びこの地を訪れたいという気持ちを後押ししました。



マダムとヴォー・ル・ヴィコント城前にて(2012年冬)

私は大学でフランス語を専攻し、大学1年生の夏、再びシャンティイを訪れました。次は3年生の夏。そして、大学院では1年間留学することになりました。留学先はフランスの南西部にあるボルドーでしたが、マダム

とはよく電話で話したり、シャンティイまで遊びに行ったりしました。マダムは私のフランス語がどんどん上達するのを喜んでいるようでした。留学を終え一度帰国しましたが、今度は在仏日本人学校での職を得て、再びフランスに戻った後も、何度もシャンティイを訪れました。何度も訪れる中で、最初にホームステイしたときにたまたま不在だった旦那さんや、もう一人の娘さん、お孫さんたちに会ったり、当時の他の派遣生のホストファミリーと再会することもできました。出会ってから30年が経ちましたが、シャンティイのホストファミリーとは今もずっと交流が続いています。中学3年生でのシャンティイへの派遣が、私の人生に大きな影響を与えたことは言うまでもありません。

私は現在、高校で英語を教えています。これまで、海外への語学研修や修学旅行で生徒を引率する機会が幾度かありました。語学研修ではホームステイプログラムもあり、引率した生徒の中にも、大学生になって再びホストファミリー宅を訪れる生徒もいるようです。これからも、生徒たちが小さな民間大使として活躍したり、語学力を向上させることで、広い視野をもち、世界に羽ばたいていく手助けをしたいと思っています。

マダムにこの原稿を書くと連絡すると、「私も姉妹都市30周年記念のために、昔の写真を貸すことになったのよ。」との返事が来ました。また、マダムに会いに行きたいと思います。

1991年 太原市派遣

林 哲平さん 毎日新聞北陸総局記者(前上海特派員)金沢市在住

いつまでも心に残っている風景がある。1991年8月、訪問を終えた太原から北京に向かう寝台列車からの夕景。日本では見たことのない、どこまでも続く平原に農作業をする人影がぽつり、ぽつりと浮かんでは後方に消えていく。

中国の歴史に魅了され、初めてその土を踏んだ中学生の私は、あの時「大陸」の大きさとそこで黙々と暮らす人たちの生命力を肌で感じたのだと思う。太原では初めて会う日本人を質問攻めにする同年代の人たちと会い、強烈な知識欲に刺激を受けた。この躍動感に触れる仕事をしたい、と今に続く根が定まったような気がする。

それから29年、私は新聞記者としてニュースを伝えている。念願かなって上海への特派員となり、2015年からの3年間は中国大陸を文字通り東西南北に飛び回った。国内勤務となった今も、折に触れて中国関連の取材を続けている。

世界第二の経済大国となった中国は、経済発展が始まった ばかりのあの当時とは一変した。どの地方都市を訪れても高 層マンションが立ち並び、一昼夜かかった太原-北京間もい まや高速鉄道で3時間弱の距離でしかない。

記者が追う「ネタ」も多岐にわたる。歴史問題や領有権問題といった敏感なニュースの一方、科学技術など日本が参考にすべきテーマも少なくない。政治家、研究者、学生、農民

……。無数の人に取材する中で、彼ら彼女らがふともらす一言を記録し、伝えることができるのは記者の楽しみの1つだ。

「中国と日本、2つの国で見方が違うのは正常なこと。相手がどう見ているのかを考える視点を伝えたかった。」2017年冬、上海の小さなオフィスの一室で南艶丹さん=当



上海の街角で

時25歳=はこう力説した。広島の原爆を描いたアニメ「この世界の片隅に」に魅せられ、友人と二人で出版社を設立。 貯金をはたいて原作の中国語版の発行にこぎつけた。中国では原爆被害について「軍国主義の報い」との見方が一般的で、悲惨な実態はあまり知られていない。悲劇に遭遇しながら全力で生き抜く主人公の姿は中国の読者にも希望を与える、と話す二人に新しい世代の中国人の可能性を感じた。

国際報道はとかく大上段に構えてしまいがちになる。そんな時自らを戒めるように思い出すのが、北京行きの列車の車窓に写る小さな農民の影であり、太原で出会った人たちだ。「一人の人間として何を食べ、どんな悩みを抱え、何に幸せを感じているのか。」14歳の旅で生まれた芽を育てながら、中国の姿をこれからも伝えていくこと。それが貴重な機会を与えてくれた故郷・姫路への恩返しでもあると感じている。

1993年 クリチーバ市語学研修参加

大里 誠治さん 岐阜県美濃加茂市職員 岐阜県在住

1993年10月から1994年7月の10か月間、姫路市とクリ チーバ市の姉妹都市交流の一環で語学研修生として初めて来 日し、姫路獨協大学で日本語を学びました。姫路で過ごした ことが私の人生の転機にもなったと感じています。

クリチーバ市では週に1、2回の日本語教室に通っていま したが、姫路獨協大学では毎日、一日中、日本語の授業を受 けていました。さらに、日常生活でもすべてが日本語であ り、日本語が上達する最高の環境で、夢のようでした。

その貴重なチャンスを生かすのは私次第だと思い、日本語 の学習はもちろんのこと、積極的に地元の方々との交流に参 加しました。茶道教室の亡き先生(姫路のお母さん)とその ご家族には、お茶のみならず、学校とは異なる様々な体験 (各種行事等への参加、日本人・多国の外国人との交流、カ トリック姫路教会に通う等)をさせていただきました。ま た、書道や日本舞踊、絵画の先生方及びその他多くの姫路市 民との出会いがあり、日本の美しい伝統文化や姫路について 多くのことを教えていただきました。

1994年5月には兵庫県の姉妹県のパラナ州出身者とし て、旧村岡町で開催された第45回全国植樹祭に出席させて いただきました。天皇皇后両陛下からブラジルの日系人を気 遣うお言葉をいただき、大変光栄で感銘を受けました。

帰国後、日本で学んだ様々な知識を生かしながら、ブラジ ルを訪れる日本人の方々のサポートをボランティアで行いま した。1997年6月に天皇皇后両陛下がクリチーバ市を訪問 された際には、在クリチーバ日本国総領事館で受け入れ準備 の一員として通訳等でお手伝いをさせていただきました。

そのご縁もあって、日本での仕事のお話をいただき、JET プログラムの国際交流員 (CIR) として岐阜県国際交流セン ターで勤務することになりました。3年間の任期を終え、ブ ラジルに帰国する予定でしたが、美濃加茂市とご縁があり、 2001年4月からは美濃加茂市役所に勤務しています。今後 も、姫路で得た多くの経験、知識等を生かして、微力なが ら、日本・日本人とブラジル・ブラジル人の架け橋になれれ ばと思います。

姫路での様々なご縁は、私の貴重な宝物になっています。四 半世紀以上たった今日でも、年賀状を交換させていただいてい る方々もいます。多くの姫路市民の皆様には大変お世話になっ たことを改めて、心よりお礼を申し上げます。合わせて、クリ

チーバ市の関係者の皆様に も初来日する機会を与えて くださり、心よりお礼申し 上げます。Himeji, Muito Obrigado. (姫路、どうも ありがとうございます)



地域日本語教育シンポジウム in 大垣にて

2012年 昌原市派遣

渋川 那音さん 大学生 韓国 ソウル在住

私は今、韓国ソウルで3年目の大学生活を送っています。 今から8年前、派遣生として昌原市でホームステイを経験 しました。その時は不安を抱く前に迷わず応募したのを覚え



派遣当時(右から3番目)



下段左から4番目

ています。当時は韓 国語を読むことも話 すこともほぼできな かったため、伝えた いことを上手く伝え られずもどかしさで いっぱいでした。し かしホストファミリー の優しい心遣いに触 れ、良い思い出をた くさん作ることがで きました。

高校生になり韓国 語の勉強を始め、高 校2年生の時に友人 と出場した「話して みよう韓国語」大阪 大会で優勝、全国大 会出場という貴重な経験をしました。そして「実際に韓国語 を話したい」と強く思うようになり、進学先をソウルの漢陽 大学に決めました。

私が所属する舞踊学科の外国人新入生は私と中国人の二 人、そして外国人だからと優遇はほとんどありませんでし た。韓国語には自信があったのに、授業での専門的な言葉や 会話の中に出てくる「生きた言葉」を理解する難しさや日常 生活の中のちょっとした習慣、文化の違いに戸惑い、落ち込 むこともたくさんありました。しかし今では、大学生活を送 りながら運転免許や資格の取得など毎日が充実しています。 生活の中から見える韓国、また海外にいるからこそ日本や日 本人の魅力の再発見もできます。ホームステイも同じく貴重 で有意義な体験でしょう。

昨今はSNSで海外の情報を簡単に得ることができます。 日韓のファッションや美味しいものもリアルタイムで共有で き、若者達の距離はさらに縮まってきていると感じます。し かし実感として、実際に出会い交流する方がお互いの国への 理解がより深まるだろうと思います。

今は新型コロナの影響で簡単に海外渡航ができませんが、 可能になった時には後輩達にもどんどん飛び出してほしいと 思います。また、未来を担う後輩達のために、今後もこの国 際交流事業が続き、私もたくましく貪欲に世界を広げていき たいと思います。

하면 된다 (やればできる)

1987年 フェニックス市派遣

佐々木 幸代さん 姫路市在住

記念誌作成のお知らせをいただき、久しぶりにアルバムを取り出しました。派遣8期生としてフェニックスを訪れたのは30数年も前のことです。記憶に残るいくつかの場面はどれもホストファミリーと過ごした時間でした。空と地平線を結ぶ稲光を車の中から見たこと。そのあとの大雨の中、プールのようになった庭のトランポリンに次々ダイブして笑いあったこと。好きなものは"スイカ"と答えたために、最後の夕食がスイカパーティーだったこと。そんな日常のささやかな思い出が懐かしいです。また、夜に家族がそろった時



左からドンヒョン、息子、娘

にいろいろなテーマで話を し、意見を求められるをい う体験に、"まず日本をじ らなくては"と強くしました。 ことを思い出しました旅の で後長い間、国内を旅ので すが、一方留学していっ頃、りして すな場で活躍したりしてもいることに焦りを感じてもい ました。 この10年間、我が家は、いくつかのプログラムを通じてホストファミリーを引き受けています。その中で大切にしているのは、思いをしっかり聞く時間を持つことです。フェニックスでホストマザーが私に居心地のよい場所を作ってくれたように、うれしかったことをお返しすること、それなら私にもできそうだったからです。7年前には息子が、姉妹都市の昌原市と相互派遣の機会に恵まれて、ドンヒョンくんとのご縁をいただきました。その後、両家そろってソウル旅行をしたり、またドンヒョンの日本への留学が決まるなど、交流は続いています。我が家をもうひとつの家族と思って、時々顔を出してくれるのが本当にうれしいです。

いろんな国に大切な家族や友達がいるということは、様々な価値観の中で生きるということだと思っています。息子や娘だけでなく、ニュージーランドやオーストラリア、ベルギーなどから我が家にステイした彼らに、それを伝えるのが私の仕事だったのかもしれません。そしていつか彼らが、世界のいろいろな場所で、自分のペースで社会の中に役割を見つけてくれたらいいなと思います。小さなことしかできない時も焦らずに。

派遣事業関係者のみなさま、40年も続けてくださって、ありがとうございます。17歳の私を応援してくれた父と母、このプログラムを通して関わりのあったすべての方へ、感謝を忘れることは決してありません。これからも温かい交流が続いていくことを心から願っています。

1999年 アデレード市派遣

ベネット 亜衣子さん 保育士 アデレード市在住

私は中学3年生だった1999年に、交換留学生としてアデレード市に滞在する機会を頂きました。私にとって、初めての外国。ホストファミリーの家は海から近く、きれいな砂浜と穏やかな海原がどこまでも広がり、ゆったりした印象を受けました。

当時私の家では、平日父は仕事で帰宅が遅く、夜遅く一人で夕食をとっていました。母は仕事の他に全ての家事をこなしていましたから、毎日朝から晩まで忙しく、そんな光景が当たり前でした。ところが、滞在先のホストファミリーの家では、平日でも家族全員で夕食を囲み、食後は汚れた食器は食器洗い機に。ホストマザーはキッチンを簡単に片付けた後、ホストファーザーと二人でソファで寛いでいます。この様子は私にはとても印象的で、帰国後、母に食器洗い機を買うように強く勧めたほどでした。今思えば、私が本当に欲しかったのは、平日でも家族一緒に食事できるような労働環境や、性別に関係なく、仕事や家事、子育てをする生活だったのかなと思います。たった10日ほどの滞在でしたが、中学生だった私は異国の環境、文化やライフスタイルの違いに強い衝撃を受けたのでした。

この体験はその後の私の価値観、人生の方向性に大きな影響を与えることになりました。高校を卒業後、外国語大学に

進むことにしたのも、 もっと外国のことが知り たいと思ったからでした。アデレード滞在から 4年後、ホストブラザー だったダローが日本に旅 行に来ることになり、私



近くのビーチで家族と

が観光案内をすることになりました。楽しく過ごすうち、私達は惹かれあい、翌年、ダローは日本で仕事を得て、しばらく日本に住むことを決めました。私は大学卒業後、希望の旅行会社に就職しましたが、毎日の長時間労働が重なるにつれ体調を崩し、2009年、ダローとの結婚を機に、オーストラリアに移住することに決めました。

アデレードに移住してから、今年で10年が経ちました。 現在私は、あの穏やかで広い海の近くで、ダローともうすぐ 2歳になる息子のカイと愛犬と一緒に暮らしています。1年 間の育児休暇の後、去年、仕事復帰しました。今は週2日、 チャイルドケアセンターで正社員の保育士として働きなが ら、自宅でグラフィックデザインの仕事をするダローと一緒 にカイを育てています。

私の場合、交換留学の体験が人生そのものを大きく変えることになりました。中学生だった私に外国を実際に体験するチャンスを与えてくださった派遣事業にとても感謝しています。これからも交流事業が続いていくことを強く願っています。

2001年 シャンティイ城・シャルルロア市派遣

長田 真実さん パルナソスホールオルガニスト 姫路市在住

幼いころから音楽が大好きで、西洋に大きな憧れを抱いていた私は、中学生の時に姉妹城・姉妹都市のあるフランスとベルギーを訪れ、これが人生初めての海外経験となりました。特に、美しい古城「シャンティイ城」が静かに佇み、遠くから聴こえてくる教会の鐘の音、街中に敷かれた馬専用の道に軽やかに響く蹄の音が印象的であったシャンティイの街。この時に感じたものを音楽で表現したいと思った私は、Château de Chantilly (シャンティイ城) というピアノ作品を作曲し、お世話になったホストファミリーに音楽の贈り物をしたのでした。

その後、私の音楽の興味はパイプオルガンへと移り、オルガニストになる道を歩み始めました。オルガンという楽器は1つとして同じものがなく、国や地域によって仕様や様式が異なるため、様々な楽器に触れて経験を積むべく、何度もヨーロッパを訪れました。中でも、私が特に興味を持ったドイツには6年間身を置き、キリスト教の教会暦に沿って送られる現地の生活にどっぷりと浸り、今もなお現存する17・18世紀のオルガンを巡ってドイツ中を旅しました。オルガンやその地の人々との数えきれない出会いは私の宝物になっています。

ドイツではどんなに小さな街や村にも教会があり、そこには必ずオルガンがあります。昔も今も教会で鳴り響いてき

たオルガンは、その街に住む 人々の生活や歴史とともにあ り、街の人々は「我が街のオ ルガン」を誇り高く語ります。 「街のみんなから愛される楽 器がある。」このことからふ と頭に浮かんだのは、私が生



ザルツブルク大聖堂のオルガンと

まれ育った街、姫路のパルナソスホールのオルガンでした。

日本には「オルガン大国」と呼ばれるほど多くのオルガン がありますが、日本人にとってはまだまだ馴染みの薄い楽器 です。「我が街、姫路にあるオルガン」をみんなから愛され る楽器にしたい!この楽器のもつ魅力をたくさんの方に伝え たい!という思いを強くしていたところ、2018年の秋より パルナソスホールオルガニストに就任することとなり、その 思いを叶えるチャンスが与えられました。多くの方が実際に オルガンに触れられる場を作り、そこで初めてオルガンと出 会う人々の感動の瞬間に立ち会える喜びはひとしおです。ま た、就任後立ち上げた演奏会企画「オルガンシリーズ」で は、オルガンのソロ演奏のみならず、様々な楽器との共演 を試み、いろんな角度からオルガンの持つ可能性や魅力を伝 えています。その傍ら、ドイツを中心とした演奏活動も続け ており、これからもオルガンのある場所に赴き、新しいオル ガンとの出会いを求めて「世界を旅するオルガニスト」とし て、私の夢はまだまだ続きます。

2010年 太原市派遣

黒木 大輔さん 会社員 島根県出雲市在住

私からは、「姉妹都市交流に参加して良かった3つの理由」をお伝えします。

その1「今その瞬間がベストタイミング」

参加したい、その気持ち以外に必要なものなんてありませんでした。コミュニケーション力も、語学力も、知識も、勇気も全て現地で手に入りました。大切だったのは、学生であるその瞬間に参加したということ。大人になって同じ場所に行っても、その時の自分が感じたことを絶対に感じ得ることはできないでしょう。学生の間に、自分の人生を左右する大



ひめじ国際交流フェスティバルにて 体験発表

きな決断を何回もしなければ なりません。私は現在、国際 交流とは全く関係のない職に 就いていますが、その時に得 た多くのスキル・経験は役に 立っていると感じます。

その2「常識は変わる」 私が太原市に行ったのは、 もう10年も前のことです。 当時の先生に「これからの中 国は大きく成長するから、そ の前に自分の目で見た方がい い」と言っていただいたのを思い出しました。帰国後しばらくすると、中国のGDPは日本を抜いて2位になりました。自分が正しいと思っていることも、国や宗教、世代、時代によって全然違うことが多々あります。私はこの経験を通して、SNSや報道、自分の考えすらも本当にそれが正しいのか、違った角度から見るとどうかと考えるようになりました。社会人になって思うことは、正解がないことの方が圧倒的に多いということ。多数決が正しいとは限らないこと。周りの意見に流されず、多角的に物事を捉え、自分自身で最適解を見つけ出す能力はこのような経験をしないと身につかなかったと思います。

その3「この経験がマイナスになることは絶対にない」

受験があるから、部活があるから、お金がないから、一人だと不安、やらない理由はいくらでも挙げられます。でも、どんなことでも「やってみたい」気持ちがあれば挑戦するべきです。もし、すごく大きな失敗をしてしまっても、それすらも大きな財産となります。数年後には笑い話として幾度となく語ることができるでしょう。

最後に、私はこの交流経験から多くの強みを得ました。10年経った今でも財団や派遣生仲間とつながりがあるところも、このプログラムのいいところです。その強みを武器に、大学入試・就職活動を戦いました。大切なのは、ただ現地に行くだけでは人生において大した強みにはならないということ。そこでの経験を今後どのように活かすかが重要です。

2006年 フェニックス市派遣

宗實 紀子さん テレビ制作会社勤務 東京都在住

私は今、テレビ番組のディレクターをしています。(担当番組:「チコちゃんに叱られる!」など)「もっといろんな人と出会いたい。もっといろんな土地を訪ねたい。もっといろんな文化や歴史を知りたい。」そんな好奇心が、日々の仕事のモチベーションです。今思えば、13年前、派遣事業に参加したことは、私の"好奇心"を増強させるきっかけだったのかもしれません。

高校1年生だった私が派遣されたのはアメリカ・フェニックス市でした。楽しいホストファミリーとの生活、各国から集まった派遣生たちとの交流は、姫路のド田舎からやってきた私にとってはとても刺激的で、ただただ楽しく時間が過ぎていったように思います。そしてもう1つ、私にとって大きな出会いがありました。それが、"ネイティブアメリカン"という存在との出会いでした。グランドキャニオン、セドナなど、先住民文化に触れる機会があり、そのデザインやビジュアル、自然の一部として生かされているという生き様に惹かれました。一方で、実は、派遣生の中に先住民の血をひく生徒もいました。しかし、彼らはほかの派遣生たちとそんなに打ち解けていない様子で、私も仲良くなることはできませんでした。なぜかその違和感が、ずっと心に残っていました。

その後、大学ではカナダ留学中に"カナダの先住民の歴史"

を学び、ゼミでは"映画から見るアメリカ先住民の描かれ方"を研究、卒業論文では"アメリカ先住民のカジノ経営"について書きました。卒論を書くにあたり、フェニックスのホストファミリーにもう一度ホームステイさせてもらい、実際にネイティブアメリカンが経営するカジノにも連れて行ってもらいました。

自分の"知りたい"を探求していく楽しさを知った私は、「社会人になっても、いろんな土地を訪れて、いろんな人と出会いたい。」という理由から、今の会社に就職しました。海外だけでなく、日本の中の身近なことでも、知らないこと、わからないことがたくさんあります。13年前に感じた憧れや違和感をきっかけに、それを"知ろう"と動き出すこと、探求することの面白さを、今年30歳の私は学んできたのだと思います。

ホストファミリーとの交流は今でも続いています。ホストブラザーのジェームズは、日本で英語の先生として働いていて、去年日本人女性と結婚しました。結婚式では、ホストファミリーとも再会し、とても楽しい時間を過ごしました。

姫路のド田舎でごく平凡 に育ってきた私にとって、 人生を彩り豊かにするいく つもの要素を、この派遣事 業でいただきました。改め て今、感謝しています。



ジェームズの結婚式にて(右から2番目)

フェニックス市からのメッセージ

フェニックス姉妹都市委員会姫路委員会長 カミール・キング さん

1956年にアメリカ大統領アイゼンハワーが "People To People" という市民外交を提唱し、これが国際的な姉妹都市交流の始まりとなりました。1976年にフェニックス市は姫路市と姉妹都市となりました。4年後、1980年に青少年姉妹都市交流プログラム (YAEP) の一環として初めて姫路から10名の高校生を受け入れました。

YAEPは、人生を変えるような経験を参加者にもたらします。派遣生たちは、他国の若者がどれほど自分たちと似た経験、あるいは違った経験をしているかを学び、国際人となります。彼らは生涯の友人を得て、また、新しい家族の一員となります。

2016年に娘が派遣生として姫路を訪れました。恥ずかしがり屋の女の子だった娘が、自信に満ちた若い女性へと成長するのを目の当たりにしました。外国へ旅に出るという経験が、彼女に独立心を芽生えさせたのでしょう。リーダーシップを発揮するようになり、大学進学への心構えもできたようでした。

彼女はホストファミリーと今でも交流を続けています。2019年には私も姫路を訪れ、娘のホストファミリーと時間を共に過ごす機会に恵まれました。大変有意義で特別な贈り物のような時間でした。YAEPのおかげで、私には姫路に第二の故郷があるのです。

YAEPが始まってから40年という大きな節目を迎えました。コロナウ



空港で手作りボードで熱烈歓迎

イルスの影響で、今は姫路とフェニックスの間の行き来はできません。しかしながら私たちは、青少年に計り知れない影響を与えるこのプログラムで、姫路との交流が再開できる日を心待ちにしています。

フェニックスYAEPプログラム元担当者 **ミスティ・コントレラス**さん

外国を訪れることは、生涯にわたる思い出になります。外国で素晴ら しい時間を過ごすことは、新たな可能性や経験によって、あなたの世界 を広げます。しかし、多くの人々にとってそのような経験は、不可能では ないにしても得難いことでしょう。

YAEPは、若い人たちにとって海外の新しい街を探索する最良の機会と言えます。10代の参加者は他国の若者とペアを組み、お互いの文化について学びます。お互いの家で過ごすことで新しい家族の一員となります。伝統的な食事をし、現地の人から教わるその土地独自の文化は、彼らの視野を広げてくれることでしょう。

姫路を訪れたフェニックスの派遣生は、街の美しさに驚きと尊敬の念を抱きます。姫路城見学や着物の着付け、茶道体験などを通じて姫路の魅力やおもてなしを満喫します。フェニックス市では、姫路の派遣生はダンスパーティーへの参加や、メジャーリーグ観戦、グランドキャニオン見学などの文化体験を楽しみます。

フェニックスと姫路はこのプログラムを40年間続けてきました。この 唯一無二の学習機会が40年の長きにわたり続いてきたのは、参加ファミリーと両市の支えのおかげです。このプログラムは国際的な人材育成と

いう意味で、未来への投資と言えます。他にはない強固な絆によって結ばれているフェニックスと姫路だからこそ、素晴らしい国際市民を輩出することができると言っても過言ではありません。



姫路のゆかた祭りを体験

***** 各姉妹(友好)都市・姉妹城紹介

フェニックス市(アメリカ)

1976年11月3日提携

全米で6番目に大きなアリゾナ州 の州都フェニックスは、ロサンゼル スの東576kmに位置します。山脈 に囲まれたソノラン砂漠の中心部



にあり、年間約310日が晴天に恵まれた土地です。プロバスケット チーム「フェニックス・サンズ」、メジャーリーグ「ダイヤモンド バックス」の本拠地として有名です。

姫路市とは国際親善都市連盟の仲介によって、合衆国建国200年 の年に姉妹都市提携を結びました。学生たちや教師の交流、芸術を 通して数多くの市民が交流しています。

アデレード市 (オーストラリア)

1982年4月19日提携

メルボルンの北西650km、南 オーストラリア州の州都アデレード は海岸沿いに位置します。夏は暑く て長く、冬は短く温暖な地中海性気



候です。周辺は緑の美しい公園に囲まれ、中心部は近代的なビルと 19世紀の面影を残す建物が美しく調和する新旧の融合した街で す。

姫路市との姉妹都市提携はアデレード市長夫妻を迎えて、調印が 行われました。今日では産業、芸術や文化、教育の分野を通じて、 さまざまな交流が行われています。

シャンティイ城(フランス)

1989年5月11日提携

名城として誉れ高いシャンティイ 城はルネッサンス期の壮麗な建築様 式を代表する建築物で市のシンボル となっています。城内には、城主オ



マール公が設立、歴代城主の収集品を集めたコンデ美術館や図書館 があり、ラファエロなどの名画、金銀細工で装丁した本のコレク ションが一般公開されています。

1989年姫路市の市制100周年を記念して、姫路城とシャンティイ城が姉妹城提携を結びました。国内の城が海外の城郭と姉妹城提携を結んだのは初めてのことです。

シャルルロア市(ベルギー)

1965年7月13日提携

ベルギーの首都ブリュッセルの南 60kmに位置するシャルルロア市は、 ベルギー5大都市のひとつで、フラ ンス語圏である南部のワロン地方最



大の街です。石造りの家や教会、城など、中世の面影を残しながら、 現在の産業発展を遂げてきました。姫路市とシャルルロア市の関係 は古く、カトリック宗派・淳心会の学校や教会などを通じて、戦後 から市民に親しまれてきました。

1964年1月のベルギー国王、王妃両殿下の来姫を契機に、姉妹 都市提携が結ばれ、姫路市初の海外姉妹都市が誕生しました。

太原市(中国)

1987年5月20日提携

中国・山西省の省都、太原市は北京の南西500キロメートルに位置しています。紀元前5世紀ごろから開かれたこの街は、16世紀ごろまで



北中国の重要な要塞に位置づけられていました。現在は、山西省第一の重工業都市として、政治・経済・文化の中心地となっています。 姫路市とは1984年の太原市友好都市考察団の来姫を契機に、

短時間とは1964年の本原用及射動門与原因の未足を突破に、 1987年5月20日、友好都市提携を行いました。教育面での交流が 盛んで、毎年、中高生が互いの市を訪問し、交流を深めています。 ※中国では「姉妹|が上下関係を意味するため、「友好|と表現しています。

クリチーバ市(ブラジル)

1984年5月14日提携

サンパウロの南西約400kmに位置するクリチーバは、ブラジル南部パラナ州の州都です。標高900mの高原にあるため、快適な気候に恵ま



れています。美術館、博物館などの文化施設も多い文化都市であり、また大学や教育機関の数も多く、古くからの学園都市でもあります。

姫路市とは1980年兵庫県知事から姉妹都市関係樹立の勧奨をうけ、兵庫県南米親善使節団へ参加し協議を重ね、姉妹都市提携を結びました。姫路市とは教育や文化を通じてさまざまな交流を続けています。

昌原市(韓国)

2000年4月18日提携

韓国南東部、釜山の西約50kmに 位置する昌原市は、韓国初の計画都 市で、慶尚南道の政治、産業、文化 の中心として発展してきました。



2010年7月1日に隣接する馬山市、鎮海市と行政合併し、東南広域経済圏第一の成長拠点としてさらなる発展が期待されています。

姫路市は旧馬山市と人口・面積・市制の歴史・産業構造等に似通った点が多く、かねてから交流があったことから、旧馬山市からの申し出を受けて姉妹都市提携を行い、2010年の合併後も交流を続けています。

コンウィ城(英国・ウェールズ)

2019年10月29日提携

英国・ウェールズにあるコンウィ 城は、1287年にイングランド王エ ドワード1世が築いた城です。自然 の防御壁となったコンウィ川と背後



は山に囲まれ、さらに旧市街は3kmにも及ぶ城壁と21の強固な塔に囲まれています。1986年に「グウィネズのエドワード1世の城郭と市壁群」として世界遺産に登録されました。

2017年7月、ウェールズ政府日本代表からの提案を受け相互交流を開始、2019年姫路市制130年を記念し、姉妹城提携を結びました。

■ 派遣都市 · 人数 (年度別一覧表)

(中:中学生、高:高校生)

都市	フェニ	フェニックス			シャンティー シャルルロ			ティイ・ルロア	太原				クリチーバ		生、局:局权生) 昌原	
	派遣	受入	派遣		派遣		派遣	受入	派遣		受入		派遣	受入	派遣	受入
年	高	高	高	中	高	中	中	高	高	中	高	中	高	高	中	中
1980	10		, , ,		,,,,		·	, ,		·			,,,		·	
1981	10															
1982	10															
1983	10		3		3											
1984	10	8	3		3											
1985	10	5	3		3											
1986	10	6	3		3											
1987	10	5	4		4											
1988	10	5	4		4											
1989	10	5	6		5											
1990	10	10	8	10	8		15*1	10								
1991	10	8	10	10	10	10	10*1	10		10						
1992	10	6	10	10	10	11	10*1	10		10						
1993	10	6	10	10	10	10	10			10						
1994	10	10	10	10	10	10	10	8		10						
1995	10	6	10	10	10	10	10			10						
1996	10	8	10	10	10	10	10			10				9		
1997	10	5	10	10	10	10	10			10			10	10		
1998	10	9	10	10	10	10	10			10			10	10		
1999	10	10	10	10	10	10	10	2		10			10	10		
2000	5	5	10	10	10	10	10			10		1.0	10	10		10
2001	6	6	10	10	10	10	10			10		10	10	9		1.0
2002	4	4	10	10	10	10	10			7		10	5	10	9	10
2003	10	10	10	10	10	10	10		_	2	2	_	8	7	7	7
2004	10	9	10	10	10		8		5	3	3	5	7	8	9	9
2005	10	8 7	6		6		8		1	2	3	7	5 2	7 5	9	12
2006	7	7	10		0		8		3	5	4		7	7	9	9
2007	4	4					8*2		1	5	10	6	6	8	7	10
2009	5	5					8*1		1	5	10		2	8	6	9
2010	4	4	4		4		8		1	3	6	4		4	8	8
2010	4	4	4		4		7		1		0	4	2	4	5	10
2012	3	3	5		5		8		5		10				8	6
2013	7	5	2		<i>J</i>		8				10				7	7
2013	3	3	5		5		9		3	3	10				10	10
2015	4	4	5		5		8*3		5	3	10				10	8
2016	4	4	5		5				6	4	10				6	6
2017	4	4	5		5		5*2		5	5	10				10	9
2018	4	4	5		3		5		7	3	10				10	10
2019	4	4	5		5		6		7	2	6	4			8	8
	309	216	231	150	222	131	257	40	53	153	115	53	94	122	138	167

※1 1990~1992年・2009年 シャンティイのみ

※2 2008年・2017年 シャルルロアのみ

※3 2015年 シャルルロア市姉妹都市提携50周年公式行事のため中学生6名、高校生2名が参加

※ シャンティイ・シャルルロア欄の受入はシャンティイのみ

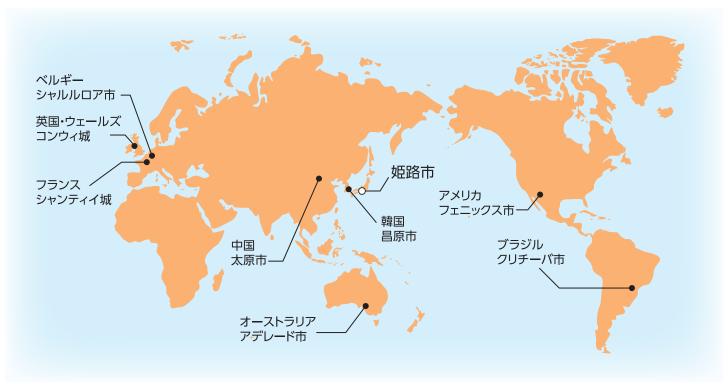
編集後記

この度のコロナ禍を、交流事業40年間を振り返る良い機会と捉えたいと考え、記念誌発行を企画しました。インターネットもEメールも無い時代に、いったいどのようにして高校生親善大使の派遣を実現させたのか想像もつきません。多くの関係者の熱意と尽力に、本当に頭が下がります。

世界も中高生を取り巻く環境も、40年前とは著しく変化しました。しかし、実際に海外を訪れ、五感で感じることが、若く柔軟な心に大きな影響を与えるのは、いつの時代でも変わらないように思います。しかも、それがのちの人生を左右するほどに大きい場合も少なくありません。

執筆を快く引き受け、素敵な文章を寄稿してくださったみなさま、ご協力いただいたみなさまに心から感謝申し上げます。この記念誌を通じて、一人でも多くの方に国際交流の楽しさや事業の意義を感じていただければ幸いです。そして、海外姉妹都市青少年交流事業が末永く続くことを願います。

姫路市の海外姉妹(友好)都市・姉妹城



※太原市は友好都市です。

HIMEJI CULTURAL AND INTERNATIONAL EXCHANGE FOUNDATION

海外姉妹都市青少年交流事業40周年記念誌 ~ 軌跡~ 2020年12月

発 行 公益財団法人 姫路市文化国際交流財団 (国際交流担当) 住 所 〒670-0012 姫路市本町68-290 イーグレひめじ3階

T E L 079-282-8950 F A X 079-282-8955

E m a i l info-iec@himeji-iec.or.jp H P https://www.himeji-iec.or.jp